

小学校各教科等担当指導主事等連絡協議会 伝達事項

1 国語科における教育課程実施上の課題と指導上の留意事項

(1) 国語科における「言語活動の充実」とは (『初等教育資料』H23.6 特集Ⅰ参照)

① 本単元で付けたい力を見極める

言語活動の充実は、あくまでも当該教科等のねらいを十分に実現するための手だてとして行うもの。学習指導要領の指導事項を基に、指導のねらいの見極めがなされなければ、言語活動は機能しない。

② 付けたい力にふさわしい言語活動を選ぶ

取り上げる言語活動の特徴をどのように生かすことで、当該単元で付けたい国語の能力を確実に育成できるのかを明らかにする。

③ 単元を貫いて位置付ける

見通しをもち、課題を解決していく学習の過程を重視する。主体的な思考・判断を伴う学びを成立させることで、指導内容を確実に定着させる。

④ 「大好き!」「はてな?」「伝えたい!」を生かす

実生活に生きる、主体的な思考・判断を伴う学びを保障する。主体的な思いが持てるときにこそ、児童は一層活発に思考し表現する。

(2) なぜ「単元を貫く」言語活動を位置付けるのか (『初等教育資料』H24.4 特集Ⅱ参照)

① 単元の指導目標の確実な実現

単元でねらう能力は、単元全体を通して指導するもの。【導入部】単元を貫く言語活動全体を見通すものになっているか。【展開部】単元を貫く言語活動と密接に結び付くものとなっているか。【発展部】児童が言語活動を自力で遂行できるようになっているか。

② 主体的な思考や判断を伴う学びの実現

児童自身が学習全体を見通したり振り返ったりできるようになる。具体的な目的や必要性を持って学習する方が、思考したり判断したりするときの手掛かりを多くつかめる。

③ 学習活動の精選

単元の学習活動が、ねらいの実現に収束していく。「単元を通してこの力とこの力を指導する」という見極めが、指導の軽重を判断する決め手となる。

④ 各教科等の学習とも呼応する、課題解決の過程の実現

児童が自ら言語活動を行うという課題解決を目指す授業づくりは、各教科等と連携する手掛かりとなる。

(3) 国語科における評価の基本的な考え方

単元の評価の観点の設定について

- ・ 「国語への関心・意欲・態度」→いずれの単元にも位置付けて評価を行うことが基本。
- ・ 「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」→当該単元で重点的に取り上げて指導する領域に対応する観点を選んで設定。
- ・ 「言語についての知識・理解・技能」→各領域の指導を通して指導する。いずれの単元にも位置付けて評価を行う。

(4) 国語科の評価規準の設定例(「指導事項」×「言語活動」で、具体的に設定する)

3・4年「B書くこと」の構成に関する指導事項として「イ・・・段落相互の関係などに注意して文章を構成すること」を、言語活動例「イ 疑問に思ったことを調べて報告する文章・・・」(調査報告文を書く)で指導する場合の評価規準 →「段落相互の関

係などに注意して、文章の構成を考える」だけでは、具体的な構成は見えにくい。そこで、『調査の目的や方法』（始め）、『調査の結果』（中）、『調査結果から考えたこと』（終わり）など、調査を報告する文章の持つ構成の特徴を踏まえて、構成を考えている」のように、具体的にどのように構成すればよいかを明確にして、評価基準を設定する。

(5) なぜ単元を貫く言語活動を位置付けて指導と評価を行うのか

① 付けたい力の再確認

常に、付けたい国語の能力、取り上げる領域、指導事項を明確にして評価を進めることで、目標に準拠した評価が行いやすくなる。

② 形に表れにくい国語の能力を顕在化し、評価可能に

5・6年の「読むこと」の指導事項「エ 登場人物の相互関係や心情、場面について描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること」を言語活動例「エ 本を読んで推薦の文章を書く」で指導 → 「大造じいさんとがん」で身に付けた読む能力が次の文章を読んだときに本当に生きて働くかを評価する場として、第三次に児童に他の椋鳩十の作品を選ばせ、自力で遂行できる言語活動を設定する。そうすることで、教科書教材で十分読む能力を付けてあげられなかった児童の読む能力を、自ら運用する場面で見取って支援することができる。

③ 国語への関心・意欲・態度の評価を妥当性のあるものに

自分で取り組みたい言語活動に向かって児童が主体的に学習しているので、教師の関心・意欲・態度の評価もしやすくなる。

2 各学校における国語科の授業改善の一層の進展のために

(1) 研究推進体制

- ① 管理職・研究主任等による的確なビジョンの共有と適切な情報提供
(言語活動事例集、国研評価参考資料、初等教育資料他)
- ② 学校全体で単元を貫く言語活動を位置付けた授業づくりの推進
- ③ 研究授業に加え、日常の授業でのチャレンジの積み重ね
- ④ 「児童が変わった！」という実感の共有

(2) 授業づくりの準備

- ① 言語活動を実際に行ってみる教材研究
教師自身が教材研究で実際に言語活動を行うことで、その種類や特徴、具体的な内容が一層明確になり、児童のつまずきやすい箇所やポイントも見えてくる。
- ② 学校図書館等で関連図書を探す教材研究
同じ作者の作品を読むことで、教科書作品の構造の理解が、更に図られることがある。
- ③ 全文掲示、学習計画の掲示などの言語環境整備
児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする上で効果がある。
- ④ 言語活動を生かした評価の工夫（「本の小箱」等で見えにくい読む能力を評価）
(第1学年) 読んだ本について好きなところを紹介する事例(言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～【小学校版】P19～P20)
与えられた場面を読み取るのではなく、第三次で必要となる、「登場人物の行動や会話に着目して想像して読む」、「好きな場面を見つけて読む」、「好きな場面を紹介する」などの読む能力を第二次で育成できるようにする。
- ⑤ 学校司書等や読書ボランティア、公立図書館との連携（並行読書を支援するシステム）
読書ボランティアに、今、教科書で行っている学習と関連した図書の選定を依頼したりそれらの図書の読み聞かせを依頼したりすることは、とても重要である。